

第15回エコミュージアム国分寺——自然と歴史・文化散策 若返るエックス山と旧石器からの恋ヶ窪

令和7年11月26日

エックス山等市民協議会

雲ひとつない青空に木々の紅葉が美しく映える中、エックス山の中央テーブル付近に34名の参加者が集合し、「第15回エコミュージアム国分寺」がスタートしました。集合場所で最初の見学地でもあるエックス山は、市とともにこのエコミュージアムを共催するエックス山等市民協議会が活動するフィールド。市と協働で樹木更新や下草刈りをはじめ雑木林の維持管理を行い、再生・保全に取り組んでいます。

さかのぼれば、第1回エコミュージアムの実施は2011（平成23）年のこと。エックス山の2009年第1期、2010年第2期の更新伐採の直後でした。以来15年を経て、エックス山は4割弱まで樹木更新が進んでいます。そこで第15回に当たる今回は、はじめにエックス山の再生・保全の取り組みとその成果について知っていただき、その後、先史から中世、近世の歴史を秘めた恋ヶ窪谷を姿見の池へと訪ねました。

挨拶や散策行程の説明のあと、まずはエックス山とこれまでの取り組みについて紹介しました。

①エックス山（西恋ヶ窪緑地）

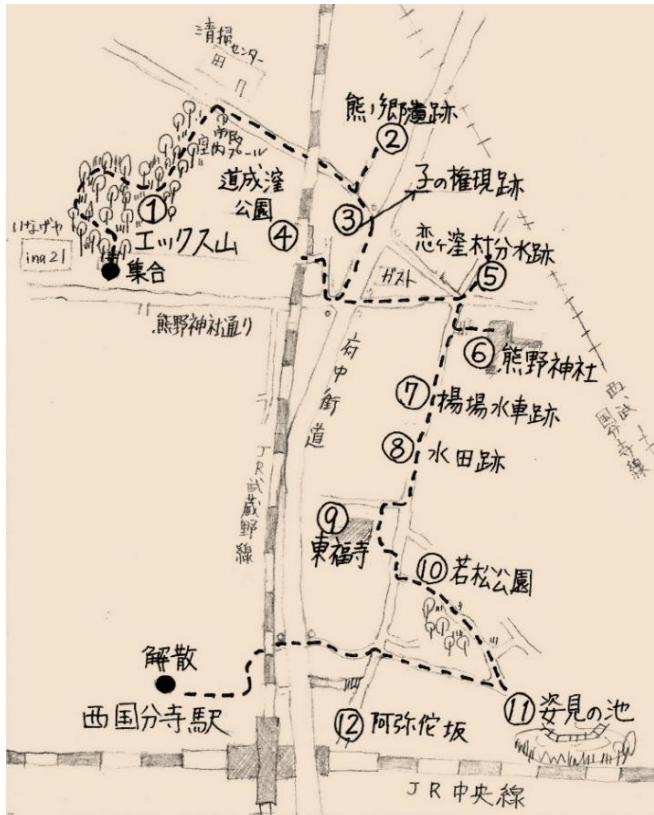
市立西恋ヶ窪緑地（通称エックス山）は2002（平成14）年及び2011（平成23）年に市有化された13,600m²の市内最大の平地林です。エックス山に降った雨は、かつては恋ヶ窪谷を通じて日立中央研究所の大池に流れ、野川となっていました。

エックス山はハケの後背地として野川の水源涵養林の一つであり、農業を営むための雑木林（ヤマ）でした。府中街道と武蔵野線により恋ヶ窪谷は分断・消滅し、当時の「みずみち」は無くなりましたが、地下水の一部は市立西恋ヶ窪道成窪公園の立坑を通じて野川に流れています。

市有化されたエックス山の整備方針の策定と管理を、市民と市が協働で行うために市有化と同時にエックス山等市民協議会が設立されました。

■エックス山等市民協議会

協議会は、市と対等・独立した組織として市と協定を締結して活動しています。活動日は、毎四半期



初月の第2金曜日に会議、毎月第2（ただし会議のある月を除く）・3・4金曜日に定例管理作業を行います。季節により臨時作業も随時行います。協議会は会費無料で、市民であれば誰でもいつでも参加して意見を言うことができます。

■整備方針の策定

2002（平成14）年に協議会が発足して、まず整備方針の策定に着手しました。市内の樹林地、水辺などをネットワーク化してエコミュージアムを形成しようという基本構想のもと、エックス山をその重要な拠点として位置付けし、昭和20～30年代風の林にしようとの方針を掲げた整備方針案を策定しました。市長に提案し、2007（平成19）年に市の整備方針として府議決定され、この方針に基づき、通路やフェンスの整備が行われ、林の若返りのための樹木更新にも着手しました。

■樹木更新の開始

2009（平成21）年1月に第1期区（A区）約450m²、2010（平成22）年1月に第2期区（B区）約1,000m²を樹木更新のために伐採しました。伐採作業はコスト節減のため、低木（4m以下）及び危険性のない中・高木は協議会員で伐採し、残りは業者に依頼しました。樹木の伐採は、萌芽更新、実生の育成、補植により若い木を育てるのが目的です。更新区でのクヌギ・コナラの萌芽率は大径株では30%台と多摩の他の地区同様に低かったのですが、ドングリからの実生は第1期区では1,200本余り、第2期区では2,300本余りと非常に多く、充分な光を浴びて元気に育ちました。エゴノキ、ヌルデ、クワ等の切り株からも沢山の萌芽が出ました。林床では光が入って眠っていた草花が芽を出し、伐採前に比べ大幅に種類が増えました。

2011（平成23）年から下草刈りとともに、萌芽や実生苗の間引き管理を行い、今や立派な林が再生されました。

樹木更新は、その後市の予算の関係等もあり中断していましたが、協議会の強い要望により、2019（平成31）年1月に第3期区（C区南）、2020（令和2）年2月に第4期区（L区・M区南）、2021年2月に5期区（C区北・D区・E区西）、2024（令和6）年1月に第6期区（K区南）で実施。これまでに約4,950m²、全体の面積の4割弱の樹木更新を行い、今年度は第7期区（F区東）で実施しています。

樹木更新区の作業、更新区以外の管理作業は協議会に参加する市民の方々により行われています。皆さんも会に参加して林の再生・保全にご協力ください。

樹木更新の進捗状況（面積は概算値です）

第1期区	2009年（平成21年）	450 m ²
第2期区	2010年（平成22年）	1,000 m ²
第3期区	2019年（平成31年）	600 m ²
第4期区	2020年（令和2年）	1,050 m ²
第5期区	2021年（令和3年）	1,000 m ²
第6期区	2024年（令和6年）	850 m ²
計		4,950 m ²

エックス山の面積 13,600 m²



■エックス山の名の由来

エックス山は通称ですが、その呼称はかつてこの樹林地が現在の熊野神社通りの南側まで広がっており、その南西部の林内を X 字に交差して南北に延びる道が通っていたことによります。この 2 本の道は江戸時代からの古い道と考えられ、北側は現在の旧市役所通りに達していました。

この旧市役所通り沿いに、1947（昭和 22）年に現市立第一中学校が開校。通学路として利用する中学生が、交差する道の形状から「エックス山」と呼びならわしたのが始まりとされています。かつては薪炭林などの平地林も「ヤマ」と称しました。



こうしたエックス山と保全再生の取り組み等についての説明のあと、樹木更新が進むにつれて林床に復活したアマナ、キンラン、ギンラン、ヒトリシズカ、フタリシズカ、ムサシアブミ、ヤマユリ、キツネノカミソリなどの草花について、写真パネルを掲げて説明。さらに、カンヒザクラ、コブシ、ヤマザクラ、ウワミズザクラなど春の林を彩る木の花についても紹介しました。

その後、第 1 期・第 2 期更新区の木立の中に設けられた観察路から、今年度の第 7 期更新区北側を抜ける観察路を説明者とともに落ち葉を踏みしめて散策し、林の若返りを実感していただき、次の見学地の熊ノ郷遺跡に向かいました。

②熊ノ郷遺跡

今から約 3 万年前から 1 万年前ごろ、古多摩川が武藏野段丘面を削り取って多摩丘陵との間に立川段丘を造り上げた時に、国分寺崖線が造られましたが、この崖線やそれに入り込む谷筋にはいくつもの湧き水があり、この湧水が集まって野川が形成されました。この野川に沿った地域には数多くの旧石器時代・縄文時代の遺跡が残っています。狩猟や採集を生業とする旧石器・縄文時代の人々は、豊富な湧水と南向きの日当たりの良い大地を求めて、野川流域に集まり、生活を営んでいたことが分かります。

野川源流域の恋ヶ窪谷に面した台地上に位置する熊ノ郷遺跡もその一つで、約 2 万 4000 年前から 1 万 2000 年前の旧石器時代を中心とする遺跡です。この遺跡の発掘調査は発見の 3 年後の 1951 年（昭和 26 年）でした。その後 1982（昭和 57）年には市道拡張に伴う調査



第Ⅲ文化層 出土石器

として第2次調査が行われましたが、2003（平成15）年に共同住宅建設に伴う第3次調査が大規模に実施され、年代の異なる複数の地層からナイフ形石器、搔器、打製石斧などの石器276点、礫1382点が出土し、ここで石器を製作していたことも分かりました。

石器の原材料のうち、黒曜石の産地は1万6千年前までは箱根産、それ以後は長野県・霧ヶ峰の近くの和田峠産であることが分かりました。旧石器時代人が広い地域で交流していたことがわかります。

■まぼろしの日本最初の旧石器時代遺跡発見地

旧石器時代の遺跡が日本で初めて発見されたのは1949（昭和24）年。考古学愛好家の青年相沢忠洋（あいざわただひろ）が群馬県笠懸村岩宿（現みどり市）の関東ローム層中から黒曜石製の石器を発見しました。それまでの日本では、ローム層中には人類が作った石器など残されているはずがないと信じ込まれていました。この発見の年の5月に、明治大学が行った発掘調査で、1万年前より古い遺物と正式に認められ、岩宿遺跡が有名になりました。

実は前年の1948（昭和23）年、国分寺住職で郷土史家星野亮勝（ほしのりょうしょう）は、西恋ヶ窪3丁目584番地付近（熊ノ郷）の赤土層があらわれた切り通しから石器を発見し、すぐに考古学者甲野勇へ伝えました。が、そのまま年が過ぎ、発掘調査は3年後の1951（昭和26）年に行われ、旧石器時代の遺跡と判明しました。発見直後に発掘調査が行われていれば、熊ノ郷遺跡が日本最初の旧石器時代遺跡の発見地となっていた可能性があります。

■その後の日本全国での旧石器発見状況

旧石器時代の遺跡はその後各地で発見され、1972（昭和47）年には仙台市の郊外で、14万年前の地層から石器を発見、群馬では2万5千年前の地層から旧石器人の大規模な環状集落も発見されている。（出典『日本全史』1991年3月15日発行講談社）

③子の権現跡

子の権現を祀る堂は、恋ヶ窪本村集落の北側、かつての鎌倉街道から西側150m入った場所に、東向きに、村氏神の熊野神社の社が西向きなので、向かい合わせに建てられたと言われています。足腰の病にご利益があるといわれ、境内の額堂にはワラジやゾウリが奉納されていました。堂の裏には神木といわれる松の大木がありましたが、昭和3年台風で倒れ、それを記念する石碑が建てられています。

恋ヶ窪村の記録『村巨細日記』によると、子の権現社の創始・来由は、はっきりしませんが、百姓十郎右衛門の先祖が勧請し、自分の土地に祀ってきたものでした。それが1784（天明4）年、東福寺との間で替え地を行い、東福寺所有地に祭られたことが記されています。その後2度（1810年前後）再建され、その頃より8月15日が子の権現祭礼の日と決められました。宵祭りには、若者による村芝居が開かれ、恋ヶ窪の人々のみならず、近隣農民も大勢集まりにぎやかでした。

現在、子の権現像は東福寺本堂南側（子聖堂）に祀られています。



昭和初期の子の権現（東福寺）

④西恋ヶ窪立坑(西恋ヶ窪道成窪公園)

1991（平成3）年JR武蔵野線新小平駅が大量の地下水の流れ込みにより水没し、武蔵野線が数ヵ月にわたってこの区間で運休するという事態が発生しました。この時、武蔵野線トンネルのそばの西恋ヶ窪三丁目においても地下水位が上昇し、住宅が床下浸水する被害が発生しました。浸水の原因は地下水の流れの変化と、それにより地下水の上流部分で地下水位の上昇現象が起きたためでした。

そこでJR東日本はトンネル内部に水抜きのための横井戸を設置し、地下水の抜き取りを開始しました。この抜き取った地下水を有効利用するとともに、住宅の浸水対策を進めるために、国分寺市、東京都、JR東日本は協議を重ね、2000（平成12）年3月に浸水対策と地下水の姿見の池及び野川への導水について合意に達し、直ちに工事に着手、2002年3月に導水工事を完了しました。

■西恋ヶ窪道成窪公園

武蔵野線建設に伴い設置された公園です。名称は、以前、この辺りの地名が国分寺村大字恋ヶ窪小字道成窪であったことに由来するようです。鎌倉時代に武将畠山重忠が遊女夙妻太夫（あさづまだゆう）の菩提を弔うため無量山道成寺を建てたといわれます。

⑤恋ヶ窪村分水

■田用水として玉川上水から分水

恋ヶ窪村分水は今から約360年前、明暦の大火灾があった1657（明暦3）年に、国分寺村、恋ヶ窪村、貫井村（現小金井市内）の三ヵ村用水組合が幕府から許可された分水です。この分水は玉川上水の分水の中では古く、砂川用水、野火止用水に次ぐもので、野火止用水が飲用水を目的としたのに対し、田用水として引水していました。この用水の利用により、分水前の検地*と比べて三ヵ村の収穫量が倍増しています。（*田畠の測量とその田畠からとれる収穫量の調査）

用水路は玉川上水と府中街道が交差する久右衛門橋の上流付近から、現在の窪東公園の西側を流れ、府中街道の恋ヶ窪交差点付近で国分寺村分水と貫井村分水の2本に分かれ、さらに、その南で国分寺村分水と恋ヶ窪分用水に分かれそれぞれの村に通じていました。

恋ヶ窪村分水には、享和3（1803）年に現在の東恋ヶ窪四丁目地内に恋ヶ窪水車も造られ、熊野神社の先からは水田が広がり、用水が何本も枝わかれして水田に水が流れ込み、姿見の池、さらには現在の西武国分寺線の下まで流れっていました。

分水路は夏草が茂って流れが悪くならないように、田植えの前頃になると村人達が川サライを行い大切に管理されていました。水路沿いの各家では川に「ドンドコ」（流れをせき止めた溜り）があり、野菜、鍋、釜や農具を洗っていました。このように生活用水としても利用されていました。

しかし、1955（昭和30）年頃になって上流部に工場などが出来たため水質が悪くなり、水田は徐々に減少し、水田を埋め立てて住宅が建つようになりました。分水路はそのほとんどが暗渠になり、熊野神社北側にわずかに空堀が残るだけでした。



■市重要史跡「恋ヶ窪村分水」に指定

熊野神社北側の恋ヶ窪村分水は長く空堀の状態でしたが、2017（平成 29）年に緑地整備に伴い発掘調査が行われました。分水の堀割は逆台形状で、玉川上水に匹敵するほどの規模で掘削され、堀幅は上面で約 6~9m、深さ約 5.2~5.5m。堀の底から 50cm ほどの深さまで水が流れていた痕跡を確認しました。

この発掘調査の結果、恋ヶ窪分水の大規模な堀割は江戸時代の姿を残す土木遺産として貴重であることから、1657（明暦 3）年の開削から 360 年にあたる 2017（平成 29）年に市重要史跡に指定。翌年 7 月に恋ヶ窪用水路跡と周辺樹林地を一体的に整備し、憩いの場「恋ヶ窪用水路周辺緑地」としてオープンしました。

⑥熊野神社

■熊野神社の由緒

熊野神社の祭神はイザナギノミコト、イザナミノミコト。和歌山県熊野神宮の大神を勧請（かんじょう）したものといわれます。本神社の由緒については「神社明細帳（1879 年・明治 12）」に、「勧請起源は不詳だが元弘、建武の頃、新田義貞と鎌倉勢との兵火で焼失。応永年間（1394~1427 年）に社殿を再建した。室町時代中頃の文明 18（1486）年 5 月、聖護院道興准后（しょうごいんどうこうじゅごう）が東行の折、「朽ち果てぬ名のみ残れる恋ヶ窪、今はた訪うも知記（ちぎり）ならずや」という御歌の御奉額があつた。1590（天正 18）年、社殿、御奉額とも兵火に焼失したと里人の申し伝えがある。1597（慶長 2）年 9 月 9 日今の社殿を建築し、再勧請した。」とあります。

■聖護院道興准后と廻国雑記

道興准后（どうこうじゅごう）は後の知足院関白近衛房嗣（ふさつぐ）の子で、天台宗本山派修験道の總本山京都聖護院の門跡となり、准三后（じゅさんごう）の称号を賜り、道興准后と称されました。1486（文明 18）年、57 歳の道興は 6 月に京都を出発し、北陸の諸国を経て関東に入り、同年暮れに近い頃、恋ヶ窪に立ち寄りました。この旅では越後で上杉氏、甲斐で武田氏など有力者と会っていますし、修験道の有力寺院も回っています。



恋ヶ窪で道興准后一行を饗應宿泊させることのできる経済的にも文化的にも土地の有力者と考えられる人は、恋ヶ窪（廃）寺の良運律師ではないかと思われます。恋ヶ窪廃寺の堂址から 1489（延徳元）年、良運律師の追善供養をしたという板碑が出土しており、道興准后一行が訪れた頃は良運律師が恋ヶ窪寺の住職であったようなので、良運律師が道興准后一行を饗宴した可能性は大きいと考えられます。

道興准后は 1486~1487（文明 18~19）年の北陸・関東・奥州の旅行記として「廻国雑記」を残し、これは江戸時代後期に群書類従の紀行部に収められ、版行（板行）されました。

【補足説明】

- 1) 歌碑の文字を書いたのは有栖川宮幟仁（たかひと）親王であり一流の書家であった。幟仁（たかひと）親王の第一皇子である幟仁（たるひと）親王は、14 代將軍徳川家茂に降嫁した和宮内親王と婚約していたことで知られている。

- 2) 聖護院は、門跡寺院の内で特に寺格の高い十三門跡の一つ。十三門跡には仁和寺、三千院、青蓮院、大覺寺、知恩院などの有名寺院が含まれる。
- 3) 門跡=皇族または貴族が住職を務める寺格の高い寺院、あるいはその寺院の住職。
- 4) 淮后(じゅごう)=淮三后(じゅさんごう)の略。三后とは、太皇太后・皇太后・皇后。
従って、道興は皇族ではないが皇族に準ずる身分を与えられた人物である。

■江戸の文化人宝雪庵可尊

熊野神社境内には自然石に刻まれた3つの句碑があります。江戸末期に活躍した俳士の俳人宝雪庵可尊（ほうせつあんかそん）の辞世の句（1886〈明治19〉年・86歳）「月花の遊びにゆかむいざさらば」と、可尊が俳聖芭蕉の句を自筆で建てた「ひよろひよろとなほ露けしやをミなへし（注：女郎花）」及びその補碑として建立の協力者を刻んだ裏面に、可尊自身が同じ女郎花を詠み込んだ「里の名の朽ぬゆかりや女郎花」の句です。



可尊は1799（寛政11）年恋ヶ窪村で生まれました。坂本八郎兵衛といい、恋ヶ窪村の農民でした。農業の合間に馬方となつて江戸に通う中、牛込の赤城神社に住む奥村蘭山（5世宝雪庵）のもとで俳諧を学び、その才能を見込まれて夫婦養子となり、47歳（1845年）で6世宝雪庵を継ぎました。「宝雪庵」は芭蕉の正統蕉門です。江戸時代の嘉永・安政期（1848～1860年）に相撲番付になぞらえて刷られた俳諧番付では、可尊は220人あまりの宗匠の中で22番目に選ばれています。江戸の俳諧宗匠として活動する中、郷里の俳人も育て、1868（明治元）年70歳で帰郷後は多摩の俳諧で活躍し、可尊の元に出句した門人は江戸から続く門人を含め3千数百人にのぼりました。宗匠としての活動のほか地域の顕彰活動にも取り組みました。

熊野神社の境内にある聖護院道興歌碑「朽はてぬ名のみ残れる恋ヶ窪 今はたとふもちぎりならすや」や前掲の芭蕉句碑もその一環として1874（明治7）年に、門人達の協力を得て建立しました。いずれも、鎌倉時代の武将畠山重忠と遊女夙妻（あさづま）太夫との伝説の地として古くから知られた恋ヶ窪を顕彰しているのです。

⑦揚場水車跡

揚場（あげば）とは、生糸をつくる工程内の「揚げ返し（あげかえし）」と呼ばれる作業を行う工場のことで、この工場用の動力として1904（明治37）年に水車が設置され、1916（大正5）年頃まで営業しました。（設置場所は現在の住所表示で西恋ヶ窪1-44-3）。

***揚げ返し：**当時は養蚕や製糸が盛んで、農家では繭から糸を小型の枠に巻き取る座繰り製糸の作業を行っていた。

小枠に巻き取った生糸（操糸）は放置するとセリシン（蛋白質）が固まり、ほぐれにくくなる。そこで、小枠から数本を束ねて大枠に巻きなおして生糸を扱いやすくした。この作業を揚げ返しという。



座繰り

⑧水田跡

恋ヶ窪村本村は、南北に入り込んだ谷に形成された集落で、中央を南北に道が横切り、その道の両側に家々が並んでいます。集落の両側では、ハケ上を畑として利用していました。1945（昭和20）年頃、ハケ下には24軒の家があり、東側、西側もほぼ同様に田、屋敷、畑が並んでいました。水田には恋ヶ窪村用水を利用し、田植えの時期には家族総出で農作業を行っていました。恋ヶ窪の水田は、昭和30年代になって上流に工場などが進出し、用水路に油や汚水が流入して水田が出来なくなり、JR武藏野線が出来た1972（昭和47）年にはほとんどの水田が埋め立てられ、住宅が建つようになりました。



田植え(西恋ヶ窪1丁目 昭和38年)



水田の農薬散布(西恋ヶ窪1丁目 昭和33年)

⑨東福寺

東福寺は武野山廣源院と号します。開山は約700年前の鎌倉時代初期と伝えられ、戦国時代の1528（享禄元）年に中興、江戸時代前期の1621（元和7）年に再興されました。『江戸名所図会』の恋ヶ窪村に熊野神社などとともに東福寺も描かれています。

■一葉松（ひとはまつ）〈植樹記念碑より〉

「鎌倉時代の初め、この地に秩父荘司（ちちぶしょうじ）畠山次郎重忠への純愛を貫き、自ら果てた傾城夙妻（けいせい あさづま）と呼ばれた美女がいました。里人が夙妻の心根を憐んで菩提を弔らうため、墓の傍らに一本の松を植えました。この松は一葉を携えるのみにして、年を重ねるにつれて重忠が赴いた西の方へ傾く風情があり、いたく里人の心を打ちました。誰が呼び始めたのか、傾城の松、一葉松というようになりました。

年を経てこの松は朽ちてしましましたが、その実より新しい松が育ちました。樹令300年以上、樹高25m、幹周り3.5mになったと記録にあります。これが2代目松で、1981

（昭和56）年12月に伐られるまで旧名主鈴木家の屋敷内に聳えていました。その幹は、高くまっすぐ伸び、枝の広がり方は奥ゆかしく上品で、多くの人を魅了しました。昔は、街道の道しるべとして遠くから眺められた時もありました。」

現在のものは3代目です。

■夙妻太夫（あさづまだゆう）伝説

鎌倉時代、姿見の池付近は鎌倉街道の恋ヶ窪宿として繁盛していました。旅籠屋には遊女があり、なかでも有名なのが夙妻太夫です。この太夫と恋仲になったのが、菅谷館（すがややかた 現在の埼玉県比企郡嵐山町）から鎌倉出仕のおりに恋ヶ窪宿に立ち寄った、坂東武士の鑑といわれた畠山重忠でした。重忠は源平合戦の際、義経に従って出陣します。



2代目の一葉松(昭和58年撮影)

あるとき、帰還を待ちわびる太夫に、彼女に横恋慕していた男が「重忠は討ち死にした」と嘘の話を伝えます。それを聞いた太夫は、絶望のあまり姿見の池に身を投げて亡くなつたということです。

その後、戻った重忠は夙妻太夫の死を知り、供養のために無量山道成寺を建て、阿弥陀如来像を安置し太夫の菩提を弔つたということです。道成寺は新田義貞の鎌倉攻めの兵火で焼失しました。

⑩西恋ヶ窪若松公園

恋ヶ窪用水に沿った地域密着型の公園で、公園サポート事業によるボランティアが活動しています。遊具のほか防災倉庫も設置され、毎週水曜には「青空ひろば」が開かれ、地域の交流の場にもなっています。

■公園サポート事業

公園サポート事業は、市民団体（自治会・町内会・ボランティアグループなど）が月1回程度、地域の公園で清掃や草取りなどの活動を行うボランティア制度です。登録団体には清掃用具の支給・貸与があり、花の植栽なども可能です。

散策時間が予定より遅れてしまい、残念ながらこの公園の見学・説明は省かせていただき、姿見の池へ向かいました。

⑪姿見の池

このあたりには鎌倉時代に恋ヶ窪宿があり、宿場の遊女たちが自分たちの姿を鏡代わりに池の水面に映していたことから、姿見の池と呼ばれるようになったと伝えられています。姿見の池には付近の湧水や恋ヶ窪村分水が流れ込み、野川最上流部の水源として清水をたたえていました。しかし、周辺の宅地化とともに昭和40年代には埋め立てられ、一時は資材置き場になっていました。



平成9年の工事前の姿見の池

国分寺市では昭和60年代から姿見の池の復活に取り組み、1989（平成元）年に「水と緑の国分寺プラン」を策定し、東京都に池周辺の緑地保全地域指定と用地の取得を依頼。1993（平成5）年に緑地保全地域に指定され、都と協力し池の復活を進めます。ところが、雨水浸透枠による湧水復活や井戸戸水の汲み上げに取り組むも期待通りにはいかず、池の水の確保が課題でした。そこでたどり着いたのが、JR武蔵野線トンネル内の地下水の利用でした。

（先に道成窪公園の西恋ヶ窪立坑で述べたように）国分寺市、東京都、JR東日本は、抜き取った地下水を有効活用するべく協議を重ね、1日最大3,000トンを姿見の池に導水する事業を進めることとしました。2000（平成12）年から武蔵野線トンネル内の地下水導水工事に着手し、姿見の池は2002年3月から水をたたえ復活しました。

■姿見の池（恋ヶ窪地区）の東山道武蔵路

7世紀後半の日本は、中央集権的な国づくりを進めていくなかで、全国を都が置かれた畿内5カ国（五畿）と7つの行政区に分け、諸国の国府を経由して都と結ぶ道路網を整備しました。これを七道駅路（東海道・東山道・山陽道・山陰道・北陸道・西海道・南海道）といいます。武蔵国は行政区としては東山道に配属されましたが、上野国（群馬県）や下

野国（栃木県）を通る東山道の駅路からは南へ大きく外れた位置にあります。そのため、上野国的新田駅付近から武藏国府に南下する支路が造られ、これが東山道武藏路です。



発掘調査によって良好な状態で埋蔵されていることが確認された3地区（西元町2丁目、泉町2丁目、西恋ヶ窪1丁目）が、2010（平成22）年8月に史跡武藏国分寺跡に追加指定されました。恋ヶ窪地区の発掘調査は1997（平成9）年に姿見の池改修工事に伴い行われ、他の調査区では側溝を伴った幅約12mの路面が踏み固められた道跡が出土していましたが、ここでは丸太で枠をつくり木杭でおさえ、アシや木の枝を敷き、10~20cmの礫を敷き詰め、さらに赤土と黒土を交互に積み重ねる「敷粗朶（しきそだ）工法」と呼ばれる版築道路の構造でした。これは湧水が多い谷の湿地に対応するためと考えられ、直線道路を構築するための古代の土木技術を知る貴重な資料であるといえます。

⑫阿弥陀坂（あみだざか）

『江戸名所図会』（1834年・天保5／斎藤月岑・長谷川雪旦）には恋ヶ窪が描かれ、本文では「阿弥陀坂」「恋ヶ窪」「傾城が松」の3カ所を項立てし説明しています。そこには、「阿弥陀坂 恋ヶ窪村の地北へ向かいて下る坂をいふ。この坂の左に傍（そ）いたる岡に草庵あり。土人、阿弥陀堂と称す」とあり、また「恋ヶ窪 同じ所、坂より下の低き地をいふ」と述べられています。

現在、地元の方は阿弥陀堂靈園を左手を見て府中街道へ上の急坂を阿弥陀坂と呼んでいるようです。しかし、その記述に従えば、もともとの阿弥陀坂は崖線から恋ヶ窪へ下る道であり、西国分寺駅のホーム北側の切り通し（旧鎌倉街道）に面影を留める坂道であったと考えられます。

姿見の池の見学・説明のあと、その場で参加者の皆さんにアンケートをお願いし、国分寺駅方面に在住の方とは一次解散。残りの方には、西国分寺駅へ向う途中で『江戸名所図会』に登場する阿弥陀坂のあたりを確認していただきました。こうして第15回エコミュージアム国分寺は、無事に終了しました。

【参考文献・出典】

『国分寺市史 上巻』『同 中巻国分寺市市史編さん委員会 1986年・1990年／『ふるさと国分寺のあゆみ』国分寺市史編さん委員会 1993年／『熊ノ郷遺跡発掘調査概報 I』国分寺市遺跡調査会 2004年／『国分寺の民俗五一本多新田・恋ヶ窪村の民俗一』国分寺市教育委員会 1995年／『国分寺市重要史跡 恋ヶ窪村分水の調査』国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会 2020年／『史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～』東京都公文書館・国分寺市教育委員会共催企画展資料 2022年10月／『恋ヶ窪村分水市重要史跡指定記念 平成30年度歴史講演会「国分寺市内の玉川上水分水・水車」記録集』国分寺市教育委員会 2019年／『国分寺市制30周年記念写真集 アルバム国分寺』国分寺市 1994年／『野川源流姿見の池（武藏野線トンネル湧水と恋ヶ窪用水の姿見の池）』国分寺市環境部自然環境課 2002年／『土木学会誌』2006年4月／「東山道武藏路の説明」国分寺市教育委員会ふるさと文化財課／『新訂 江戸名所図会 三』市古夏生・鈴木健一校訂 ちくま学芸文庫 1996年